歴史・文化資源の活用及びその周辺地域との連携による地域活性化について

～登呂エリアをモデルとした歴史・文化資源の活用方策～

答　申　書

平成31年３月

静岡市行財政改革推進審議会

写

平成31年３月20日

静岡市長　　田　辺　　信　宏　様

第８期静岡市行財政改革推進審議会
会　長　　田　形　　和　幸

歴史・文化資源の活用及びその周辺地域との連携による地域活性化について
～登呂エリアをモデルとした歴史・文化資源の活用方策～（答申）

平成30年10月16日付け30静総総第1927号をもって諮問のありました「歴史・文化資源の活用及びその周辺地域との連携による地域活性化について～登呂エリアをモデルとした歴史・文化資源の活用方策～」について、本審議会として慎重に審議し、意見を取りまとめましたので、答申します。

はじめに

本審議会は、平成30年10月16日、田辺信宏市長より、第３次静岡市総合計画において目指している「歴史文化のまち」の実現に向け、「歴史・文化資源の活用及びその周辺地域との連携による地域活性化」について諮問を受けました。

静岡市は、悠久の歴史の中で多彩な文化を育んできた都市であり、市内には歴史や文化といった数々の地域資源が点在しています。加えて、平成33年度（2021年度）には、「歴史文化のまち」の拠点として、「（仮称）静岡市歴史文化施設」が駿府城公園エリアにオープンする予定です。

また、国内外においても、歴史・文化への関心は高まっており、今後ますます歴史・文化資源の活用の可能性は広がっていくものと予想されます。

こうした状況から、今ある歴史・文化資源をさらにみがきあげ、文化力を経済力へ転換させることは、今後の静岡市の活性化において非常に重要な課題であるとの共通認識の下、審議会での審議を行いました。

審議に当たっては、国指定特別史跡である登呂遺跡、国指定重要文化財である登呂遺跡からの出土品を数多く所蔵する登呂博物館、人間国宝・芹沢銈介の専門美術館である芹沢銈介美術館があり、全国的にも高い歴史的・文化的価値を持つ登呂エリアをモデルとし、現地を視察した上で、その活用方策について検討しました。

民間企業経営者や学識経験者などの多様な委員が、それぞれの知見や経験を活かして自由に意見を出し合ったことで、多くの新しいアイデアが生まれたものと考えています。

本答申は、そのアイデアを提言としてまとめたものです。実現に当たっては、様々な制約等があろうかと思いますが、「まず何かやってみる」ことが重要です。本答申がその後押しとなり、「歴史文化のまち」としての静岡市の活性化につながることを期待します。

平成31年３月20日
静岡市行財政改革推進審議会
会　長　　田　形　和　幸

目次

Ⅰ　背景と現状整理

１　背景　・・・・・・・・・・・・・・・・・　１

２　答申に向けての現状整理（登呂エリアの現状）　・・・・・・・・・・・・・・・・・　４

Ⅱ　静岡市行財政改革推進審議会からの提言

１　登呂エリアの目指す姿の実現に向けた提言　―歴史・文化資源の活用方策―

（１）提言の全体像　・・・・・・・・・・・・・・・・・　８

（２）具体的な取組　・・・・・・・・・・・・・・・・・　10

２　取組を進めるに当たってのポイント　・・・・・・・・・・・・・・・・・　21

参考資料　・・・・・・・・・・・・・・・・・　23

第８期　静岡市行財政改革推進審議会委員名簿　・・・・・・・・・・・・・・・・・　46

諮問事項に係る審議経緯　・・・・・・・・・・・・・・・・・　46

諮問書（写）　・・・・・・・・・・・・・・・・・　47

Ⅰ　背景と現状整理

1　背景

（１）本市の状況

静岡市は、悠久の歴史の中で多彩な文化を育んできた都市である。その足跡は市内の至るところに残っており、各時代の様子を垣間見ることができる（表１）。

【表１　静岡市の史跡等】

時代	史跡等	文化財等指定(指定年)	特徴
弥生時代 （２世紀）	登呂遺跡	国指定特別史跡（S27）	日本でコメ作りが始まった時期の農耕集落の様子を示す重要な遺跡
古墳時代 （６世紀）	賤機山古墳	国指定史跡（S28）	駿河国を治めた有力豪族の墓で、その規模と副葬品から中央と東海地方とのつながりを示す遺跡
奈良・平安時代 （８～11 世紀） （年代不詳）	片山廃寺跡	国指定史跡（S40）	仏教文化を伝える拠点となった奈良時代の寺院（駿河国の国分寺）跡
	三保松原	国指定名勝（T11） ユネスコ世界文化遺産（構成資産）（H25）	奈良時代から多くの和歌に詠まれ、浮世絵にも描かれてきた名勝地
室町時代 （14～16 世紀）	今川館跡		東海地方随一の戦国大名であった今川氏の館跡
	臨済寺	国重要文化財（本堂：S58）	今川家の菩提寺であり、徳川家康が幼少期に預けられていた寺
江戸時代 （17～19 世紀）	駿府城跡		徳川家康による大御所政治の拠点となった城跡
	小島陣屋跡	国指定史跡（H18）	小島藩藩主･松平氏の居所であった江戸時代中期の大名陣屋跡
	久能山東照宮	国宝（御社殿：H22）	徳川家康の埋葬地であり、全国東照宮の創祀
	静岡浅間神社	国重要文化財 （社殿：S46、宝蔵・神厩舎：H11）	古くから駿河国総社として信仰され、徳川家とも縁の深い神社
	朝鮮通信使遺跡 （清見寺境内）	国指定史跡（H6）	日韓友好の歴史である朝鮮通信使を接待した場所（※所蔵する「朝鮮通信使詩書」はユネスコ世界の記憶に登録（H29））

「第３次静岡市総合計画」では、「歴史文化のまち」を目指す都市像として掲げ、「歴史や文化を地域資源としてとらえ、みがきあげ、新たな経済的な価値を創造していくことで、市民の皆さんの郷土の歴史や文化に対する誇りを育み、文化力を地域の活力、経済力に転換することにより、『都市の発展』を目指して」いくとしている。

平成33年度（2021年度）には、その「歴史文化のまち」の拠点として、「（仮称）静岡市歴史文化施設（以下「歴史文化施設」という。）」が駿府城公園エリアにオープンする予定である。この歴史文化施設を中心に、市内に点在する歴史・文化資源をより一層みがきあげ、ネットワーク化を図っていくこととなる（図１）。

【図１　歴史文化施設と市内の主な歴史・文化資源】

（２）社会の状況

国内では、昨今の「歴女」や「城めぐり」、「御朱印集め」、「日本刀」などのブームに象徴されるように、歴史・文化資源への関心は高まっている。

海外においても、歴史を含めた日本文化に対して注目が集まっており、平成30年の訪日外客数が3,100万人を超える見込みとなるなど、今後ますます歴史・文化資源の活用の可能性は広がっていくものと予想される。

このような状況を受け、国の文化財政策も転換期を迎えている。平成29年には、文化庁の文化審議会にて、新しい時代に向けての文化財の保存と活用の在り方が検討され、答申が出された。

≪参考≫「文化財の確実な継承に向けたこれからの時代にふさわしい保存と活用の在り方について（第１次答申）」（抜粋）（文化審議会、平成29年12月８日）

Ｖ．その他推進すべき施策

１．博物館の役割強化

……また、博物館等が文化財の保存と活用が両立するよう専門的な観点から相談、助言を行いながら、地域の特色を活かした地域振興、観光振興策と連携することも必要である。……

２．国際交流や訪日外国人、障害者への対応

文化財は我が国の歴史や文化等の理解に欠かすことができないものであり、国際交流においても重要な役割を示す。……日本に来訪する多様な方々に文化財の魅力を一層理

解してもらえるよう、……様々な手法を工夫し多様な人材と協働して取り組んでいくことが重要である。……

３．文化財の魅力の発信強化や先端技術との連携
文化財の持つ潜在的な力を一層引き出し、多くの人の参画を得ながら社会全体で文化財を支えていくためにも、文化財の魅力の発信強化が必要である。……

（３）答申に向けた背景の整理

（１）、（２）で述べた状況に鑑みると、静岡市においても、先に示した市内の歴史・文化資源を観光資源としてより有効に活用することができれば、「歴史文化のまち」としての市の活性化が図られるものと考えられる。

その点において、今回の諮問「歴史・文化資源の活用及びその周辺地域との連携による地域活性化について～登呂エリアをモデルとした歴史・文化資源の活用方策～」は、まさに時宜を得たものであると言える。

また、モデルとして挙げられた登呂エリアには、全国に３ヵ所しかない弥生時代の国の特別史跡（※）で、全国的にも知名度の高い登呂遺跡、775点もの国の重要文化財を所蔵する登呂博物館、人間国宝・芹沢銈介の作品や収集品を数多く所蔵する芹沢銈介美術館があり、今後の活用において大きな可能性を秘めている。

以上のことから、本審議会としても諮問の背景となった問題意識を共有し、検討を行うこととした。

※弥生時代の国の特別史跡：登呂遺跡、吉野ヶ里遺跡（佐賀県）、原の辻遺跡（長崎県）の３ヵ所。

2　答申に向けての現状整理（登呂エリアの現状）

登呂エリアは、主に登呂遺跡、登呂博物館、芹沢銈介美術館から構成されている（図２）。

【図２　登呂エリア】

※登呂エリア：黄色の枠内の色付けされている部分

これらは、以下のとおりそれぞれ全国に誇るべき歴史的・文化的価値の高い文化財を有している。

登呂遺跡：国の特別史跡

■国の特別史跡としての価値

登呂遺跡は昭和27年に、弥生時代の遺跡としては初めて国の特別史跡に指定された。

特別史跡は「国宝」に匹敵する意味を持っており、学術的な価値が特に高く、日本文化の象徴と評価されるものである。

登呂遺跡は、特に以下の２点について高く評価された。

①日本の初期の稲作文化の実態が初めて証明された遺跡であること（※）。

②様々な分野の専門家が手掛けた発掘調査であり、戦後の日本の考古学の先駆けとなったこと。

※登呂遺跡において、日本で初めて弥生時代の居住域と水田域が一体的に発見されたことで、弥生時代の米作りを営む農耕集落の実態が確認できた。

■日本初の学際的な発掘調査

登呂遺跡の発掘調査には、考古学だけでなく、人類学、歴史学、地質学、動植物学、建築学、農業経済学など様々な分野の専門家たちが30名以上も集まり、多角的に調査

を進めた。これにより、考古学だけではわからなかった登呂遺跡を取り巻く環境、ムラの形態などが具体的に明らかとなった。
　このように学際的な調査が行われたのは登呂遺跡が初めてであり、その後の日本の遺跡発掘調査に多大な影響を与えた。
　また、登呂遺跡の発掘調査をする上で結成された静岡市登呂遺跡調査会は、現在の日本考古学界の中心団体である日本考古学協会の母体となった。

■戦後日本の希望の光となった登呂遺跡の発掘
　登呂遺跡の発掘により、戦前までの神話を基にした歴史ではなく、科学的な根拠に基づく事実としての歴史が明らかとなった。このことは、日本人のルーツを知る貴重な発見として、戦争で疲弊した人々の希望の光となった。その発掘調査の過程や成果は全国的にも大きな注目を集め、国会から発掘のための資金が交付されたほどであった。
　また、発掘作業には、専門家だけでなく、地元の中高生を中心に多くの市民が参加した。これは、現代の市民ボランティアの先駆けとも言えるエピソードである。登呂遺跡の発掘によって、郷土の歴史に対する機運が高まり、郷土研究活動などが盛んに行われるようになった。

登呂博物館：国の重要文化財を所蔵
　特別史跡登呂遺跡と一体となり、出土品を収蔵・展示するとともに遺跡内へも活動を展開する博物館として、前身の市立登呂博物館（昭和47年建設）をリニューアルし、平成22年に開館した。
　平成28年、収蔵する出土品（土器、農工具、銅環など）775点が、「弥生時代の生業や集落の実態を、初めて学界に呈示した遺跡からの出土品であり、また戦前から戦後まもなくにかけての日本考古学の研究史を語るうえで欠かせない資料」として国の重要文化財として指定された。
　現在は、参加体験型ミュージアムとして、１階に弥生人の生活を体験できる弥生体験展示室、２階に「東アジアの中の登呂遺跡」という広域的な視野に立つ展示を行う常設展示室及び年４回の企画展を行う企画展示室を備えている。

芹沢銈介美術館：人間国宝・芹沢銈介
■国内外で評価される「型絵染」の技術とデザイン
　芹沢銈介は、独自のデザインと色のセンス、染色の技術により、昭和31年に重要無形文化財「型絵染」の保持者（人間国宝）に認定された。その作品群は、国内のみならず海外でも高い評価を受け、昭和51年にはフランス政府に招かれ、国立グラン・パレ美術館で大きな個展を開催した。芹沢の作品はパリの人々に深い感動を与え、後にフランス政府から「フランス芸術文化功労章」を受けるに至る（昭和56年）。
　芹沢の作品は今も多くの人に愛され続けており、国内外で展覧会が開催されている。

■鋭い審美眼による収集品の数々

若い頃から様々な工芸品を集めることが好きだった芹沢は、昭和41年のヨーロッパ旅行を契機に、本格的にいろいろな品物を集めるようになった。

自ら「もう一つの創造」と呼んだその収集は日本のものに留まらず、アジア、アフリカ、ヨーロッパ、北アメリカ、南アメリカ、オセアニアなど、まさに全世界のもので、戦後収集したものだけで6,000点を超えると考えられる（うち約4,500点が芹沢銈介美術館に収蔵）。やがて収集した品物だけで展覧会を開くようになり、「芹沢さんの集めたものはすごい」と評判になった。

収集品の中には、民俗資料として貴重なものも少なくないが、全体を見渡すと、芹沢自身の鋭い審美眼が強く反映されていると言える。

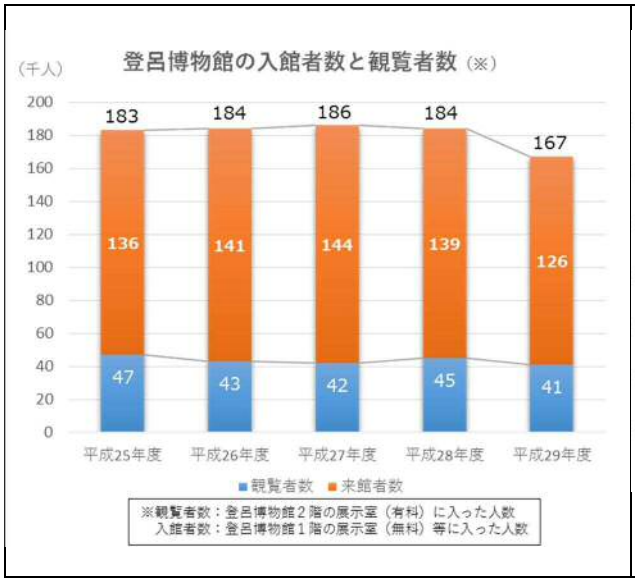
■建築作品としての美術館「石水館」

芹沢銈介美術館の本館は、日本の建築界の巨匠と言われる白井晟一の設計によるものである。芹沢が自らの作品とコレクションを収蔵する施設をつくるに当たり設計を依頼し、白井にすべてを委ねた。白井はこの建物を自身が最も好んだ京都・高山寺の石水院にちなんで「石水館」と命名した。

石水館は、登呂遺跡の雰囲気に自然に溶け込むように、石や木、水といった天然素材で構成され、石を積み上げた量感ある外壁、ゆるやかな銅板葺きの屋根、そして白木の楢材の組天井を持つ展示室が池を巡るように配されており、芹沢芸術の鑑賞の場にふさわしいゆったりとした空間を演出している。

しかし、以下の表２に示すとおり、登呂博物館及び芹沢銈介美術館の入館者数・観覧者数は減少傾向にあり、歴史・文化資源として十分に活用できているとは言えないのが現状である。

【表２　登呂博物館及び芹沢銈介美術館の入館者数・観覧者数推移】



そこで、本審議会では、登呂エリアの活用に係る具体的な取組の検討に先立って現地を視察し、そこで感じた登呂エリアの「優れている点」と「改善すべき点」について意見交換を行った。主な意見は以下のとおりである（表３）。

【表３　登呂エリアの優れている点・改善すべき点】

優れている点	改善すべき点
【登呂エリア全体】 ・復元住居等と登呂博物館、芹沢銈介美術館がコンパクトにまとまっており、見て回りやすい。	【登呂エリア全体】 ・登呂エリア全体として集客を図るような情報発信等ができていない。 ・登呂エリアへのアクセス方法がわかりにくい。
【登呂遺跡】 ・富士山が見える、ザリガニやトンボが採れるなど、景観や自然環境に恵まれている。 ・弥生時代の遺跡として歴史的・学術的な価値が高く、全国的に知名度もある。 ・火起こし等の体験メニューが充実しており、ボランティアガイドの説明も聞ける。	【登呂遺跡】 ・登呂遺跡における植栽等による景観保持が十分でなく、遺跡に来た特別感･高揚感が感じられない。 ・特別史跡としての存在感が薄れてきている。 ・登呂遺跡の持つ価値をうまく伝えることができていない。
【登呂博物館】 ・登呂遺跡からの出土品やその研究成果等の展示が充実している。	【登呂博物館】 ・施設内に有効に活用できていないスペースがあり、魅力的な空間となっていない。
【芹沢銈介美術館】 ・人間国宝・芹沢銈介の作品や収集品が多く所蔵されており、質の高い美術館である。 ・建物自体が素晴らしいデザインであり、観光の対象になり得る。	【芹沢銈介美術館】 ・市民の間でも芹沢銈介の認知度が低下してきている。 ・優れた建築物としての美術館の魅力が活かされていない。

これを踏まえ、地域の活性化、ひいては「歴史文化のまち」の実現に資するため、登呂エリアをどのように活用すべきかという観点から、具体的な取組について検討した。

Ⅱ　静岡市行財政改革推進審議会からの提言

1　登呂エリアの目指す姿の実現に向けた提言　―歴史・文化資源の活用方策―

（１）提言の全体像

今回、本審議会では、「地域活性化」という最終的な目的の達成に向けた歴史・文化資源の活用方策について、登呂エリアをモデルとして検討し、①市外（県外・国外）↗

目指す姿

稼げる施設（文化力を経済力へ）

- 各施設に人が訪れることで周辺地域にも人が流れ、登呂エリア内外への民間参入が促進される
- 訪れた人による登呂エリア内外での消費活動が活発化する

期待する変化

- 登呂エリア（登呂遺跡・登呂博物館・芹沢銈介美術館）に人（観光客、地域住民等）が多く訪れる／何度も訪れる

提言（具体的な取組のイメージ）

①市外（県外・国外）からの誘客を図る（「外」への仕掛け＝観光客等が訪れるきっかけづくり）

歴史・文化資源の訴求力を高める

ア　登呂エリアが持つ価値を訴求力へつなげる(P.10)
各施設が持つ本質的な価値を再認識するとともに、その価値を「登呂エリア」として捉えた上でどのようにアピールしていくかを検討し、今後の取組の方向性を明確化する。

歴史・文化資源を線でつなぎ、面で展開する

A　市内外の観光施設等とのネットワーク化(P.10)
「(仮称)歴史文化施設」を中心として市内の歴史・文化資源等をネットワーク化するとともに、近隣市町も含めた観光施設等との連携を深める。

【例】歴史・文化資源をつなぐ「ストーリー」を含めた観光ルートの構築

B　ＳＮＳ等を活用した効果的な情報発信(P.11)
来場者がＳＮＳ等で情報を発信したくなるような仕掛けをすることで、効果的な観光プロモーションにつなげる。

【例】ＳＮＳに映えるフォトスポットを設置

写真：伊豆市役所観光情報サイトより

C　駅等の乗換ポイントからの来場者の誘導(P.12)
静岡市を訪れた人に「ここにも行ってみよう」と思わせる仕掛けや、多様な移動経路・移動手段をわかりやすく示すことで誘客を図る。

【例】駅等に来訪者の興味を喚起するモニュメントを設置

②

非日常的

ア　非日常的な景観・空間
日常から切り離された景観
たりとした時間を過ごせる

【例】植樹や水田の復元等に
体感できる景観の演出

イ　特別な場所での特別な
特別感のある場所で、普段
供する。

【例】登呂遺跡でのキャンプ
芹沢銈介美術館でのナ
水田復元エリアでの泥

ウ　「いつでも」「誰でも
る仕掛け(P.14)
多くの人が集まるイベント
劇場」推進事業を展開する
とで、恒常的な賑わいを創

【例】フェスなど集客力の高い

エ　日常的に様々な人が集
ス」としての場所づく
地域コミュニティの核とし
人が集える場所とする。

【例】飲食をしながら休憩で

解決の方向性

- 登呂遺跡・登呂博物館・芹沢銈介美術館の価値を活かしながら、民間企業や地

課題

- 地域活性化に向け、登呂遺跡などの歴史的・文化的価

からの誘客を図る、②訪れた人が楽しむ、③地域に対する愛着を育むの３つの観点で提言をまとめた。以下にその全体像を示すが、各提言については次項において詳述する。

（２）具体的な取組

①市外（県外・国外）からの誘客を図る（「外」への仕掛け＝観光客等が訪れるきっかけづくり）

ア　登呂エリアが持つ価値を訴求力へつなげる

「２　答申に向けての現状整理（登呂エリアの現状）」において述べたとおり、登呂エリアは、主に登呂遺跡（公園）、登呂博物館及び芹沢銈介美術館の３つの施設から構成され、それぞれが世界・全国に誇るべき歴史的・文化的価値の高い文化財を有している。

さらに、登呂遺跡・登呂博物館は弥生時代の遺跡とそこからの出土品であるのに対し、芹沢銈介美術館は昭和から現在にかけて高い評価を得ている染物等の芸術作品（あるいは芹沢銈介そのもの）と、まったく展示内容の性質が異なる。

これは、見方を変えれば、それぞれの施設で全国からの集客を図ることができ、またその客層が重複しないがゆえに相乗効果も期待できるということでもあり、登呂エリアの強みと言える。

しかし、登呂博物館及び芹沢銈介美術館の入館者数等が減少傾向にあることなどから推し量るに、各施設の価値をうまく魅力につなげられていないのではないか。また、まったく性質の異なる施設が同じエリア内にあるといった登呂エリア全体としての強みも明確になっていないように思われる。

各施設の持つ本質的な価値を改めて認識するとともに、その価値を登呂エリア全体として捉えた時に、まずどのようなターゲットにどのようにアピールしていくことが効果的かを検討し、今後の取組の方向性を明確にする必要がある。

※登呂エリアを含め、市内に点在する歴史・文化資源の魅力を面として展開していくためには、以下のＡ～Ｃについても検討が必要である。

Ａ　市内外の観光施設等とのネットワーク化

「歴史文化施設」は、旧青葉小学校跡地に位置し、今川・徳川の歴史を中心とした静岡市の歴史を紹介する歴史ミュージアムであるとともに、歴史・文化資源を含めた市内各観光施設等の情報を発信するビジターセンターとしての機能も有している。

【イメージ図】（仮称）静岡市歴史文化施設

この「歴史文化施設」を中心として、市内の歴史・文化資源を、「今川」や「徳川」といったキーワードを軸に「ストーリー」で関連付けることなどによりネットワーク化を図ることで、静岡市における観光客の回遊性が高まるとともに、「歴史文化のまち」たる静岡市のイメージ向上にも資するのではないか。

また、観光客の誘致に当たっては、観光客のニーズに対応できる多様な観光ルートを設定することが効果的である。観光客の属性や目的、交通手段、静岡市に立ち寄る前後の行動等を分析した上で、静岡市としてどのようなネットワークを構築し、インバウンド客を含めた観光客の誘致を図っていくか、検討が必要である。

Ｂ　ＳＮＳ等を活用した効果的な情報発信

近年、情報発信においてはＳＮＳが非常に重要で欠かせないツールとなっている。

特に若い世代やインバウンド客にとって、実際の利用者の生の声やその場所の様子を知ることができるＳＮＳは、訪問先を決める際などに最も重視する情報源の一つとなっている。

主体的な情報発信はもちろん、2017年に「インスタ映え」が流行語大賞となったことに示されるように、いかに来場者に情報を拡散してもらうかが鍵となる。

登呂エリアについては、現状ではエリア内の景観の調和が図られていないなどの課題があるものの、豊かな自然の中に竪穴式住居が復元されており、ＳＮＳで話題に上るような写真が撮影できる可能性がある。

そのためには、景観・空間を整える（※12～14ページ「②ア　非日常的な景観・空間の演出」において詳述）とともに、「映える」写真が撮れるスポットを設定し、フォトフレームを設置したりフォトコンテストを開催するなど、ＳＮＳへの掲載を促す仕掛けを作ることが必要である。

【例】ＳＮＳへの投稿を促す仕掛け

iZU FRAMES（修善寺虹の郷）

・富士山を背景に「一枚の絵」となる写真を撮ることができる

（写真：伊豆市役所観光情報サイトより引用）

「ご縁の国しまね」Instagram ﾌｫﾄｺﾝﾃｽﾄ（島根県）

・指定のハッシュタグをつけて投稿することで応募

・受賞者には旅行券が贈られる

（写真：島根県特設サイトより引用）

また、昨年11月にオープンした「日本平夢テラス」の展望回廊において、登呂エリアを望む方向に登呂遺跡や登呂博物館、芹沢銈介美術館の紹介パネルを設置するなど、観光施設も含めて施設相互に情報発信することも考えられる。

なお、情報発信の際は、今後増加が予想されるインバウンド客の誘致を図るた

めにも、多言語化に配慮する必要がある。

C　駅等の乗換ポイントから来場者を誘導する仕掛け

登呂エリアは、ＪＲ静岡駅や静岡空港といった主要な交通の拠点からやや離れた場所にある。一方、平成31年秋には、登呂エリアにほど近い大谷川放水路東側の「日本平久能山スマートインターチェンジ」が供用開始される予定であり、静岡市への来訪者の増加が期待されている。

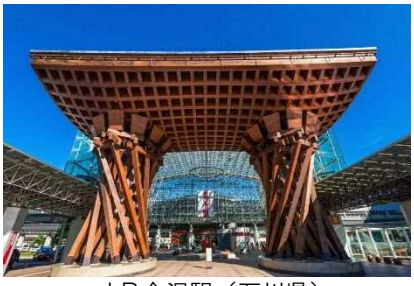
登呂エリアを訪れるきっかけを増やすためには、この駅や空港、インターチェンジといった乗換ポイントを通過する来訪者に、「ついでにここにも寄ってみよう」と思わせる仕掛けが効果的である。

その仕掛けとしては、まず、乗換ポイントにおいて、登呂エリアへの移動経路や移動手段に関する情報をわかりやすく示す工夫をすることが必要である。

それに加え、乗換ポイント、またそこから登呂エリアへの導線に看板等を設置したり、観光客の高揚感を高める雰囲気（景観）づくりをするといったことで誘客を図ることが考えられる。

【例】乗換ポイントからの誘導を図る仕掛け

ＪＲ福井駅（福井県）
福井県を象徴する恐竜のモニュメント



ＪＲ金沢駅（石川県）
石川県で盛んな能の鼓をイメージした「鼓門」
（写真提供：石川県観光連盟）

また、来訪者が円滑に移動できるよう、移動方法の多様性を確保することも一つの手段である。

②訪れた人が楽しむ

ア　非日常的な景観・空間の演出

≪登呂遺跡の景観について≫

「登呂」と聞いてまずイメージするのは、現代まで連綿と続く日本の農耕文化が始まった弥生時代を代表する遺跡ということである。

特に登呂エリアを訪れる観光客は、多くがそこで日常から切り離された弥生時代の景観・空間を楽しむことを期待しているのではないだろうか。

では、現在の登呂遺跡はどうか。

バスで訪れた場合、バス停を降りてすぐ復元された竪穴式住居が目に入るため、来場者はその時点である程度弥生時代を感じることができる（写真１）。

しかし、自家用車で訪れた場合、駐車場からの導線に遺跡の入口を示すようなものがなく、また目の前に広がる水田跡もそれとわかる状態になっていないため、

来場者は高揚感を高められないまま登呂博物館の付近まで歩いてきてしまうことになる（写真２、３）。

【写真１】
バス停側からの風景

【写真２】
駐車場からの導線

【写真３】
駐車場前の水田跡

また、遺跡内に樹木が植えられているものの数が少なく、登呂エリア内の景観保持が十分でない（写真４、５）。

【写真４】
登呂遺跡北側の風景

【写真５】
遺跡内遊歩道からの風景

「弥生時代の特別史跡」という登呂遺跡の持つ歴史的価値を最大限活かすためには、訪れた人がその瞬間から「弥生時代に『タイムスリップ』したようだ」と感じられる景観・空間になっていることが非常に重要である。

その景観・空間づくりが不十分だと、第一印象が「がっかり感」につながってしまい、またその中でどのような体験をしても高揚感が半減してしまう。

例えば、縁辺の樹木を増やすことで周囲の日常的な空間を切り離すとともに、遺跡内にも一部植樹をすることで、写真として映える景観を演出することが考えられる。

【例】景観を整えるための植樹

現在の風景

画像合成による植林された風景のイメージ

現在広場のようになってしまっている水田跡（写真３参照）についても、水田として復元し、水田・水路の持つ機能を十分に発揮することで、登呂遺跡の特徴の一つである『日本の農村の原風景』を演出する一助になるのではないか。

遺跡内で体験等をする来場者に貫頭衣を着てもらい、「弥生時代の風景」の一部に溶け込ませることもユニークな演出である。

≪登呂博物館及び芹沢銈介美術館の館内の空間について≫

登呂博物館及び芹沢銈介美術館内の空間も重要な要素の一つである。

登呂博物館については、特に入館してすぐ目に入る登呂交流ホールや情報コーナー、映像コーナーの部分が殺風景であったり雑然としていたりして、来場者の高揚感を高められる空間となっていない（写真６～８）。

屋外（登呂遺跡）の弥生時代の雰囲気を壊さないよう、博物館内の空間づくりについても工夫が必要である。

【写真６】
登呂交流ホール

【写真７】
情報コーナー

【写真８】
映像コーナー

芹沢銈介美術館については、その建物自体が建築家・白井晟一氏の作品（「石水館」、昭和56年竣工）だということもあり、格調高い美術館となっている。

展示されている芹沢銈介の作品やコレクションと建築が相俟って、来場者は芹沢銈介の世界に浸ることができる（写真９～11）。

遺跡の中にこのようなまったく趣の異なる空間が存在するということが、登呂エリアの魅力の一つになると考える。

【写真９】
芹沢銈介美術館エントランス

【写真 10】
館内特別室

【写真 11】
館内池

<u>イ　特別な場所での特別な体験の提供</u>

≪弥生時代の生活の体験≫

現在の登呂博物館は「参加体験型ミュージアム」をコンセプトとしており、登呂遺跡（野外）で火起こしや土器での炊飯などの体験、博物館内でモノづくりや田植え、稲刈り等の模擬体験を提供している（写真12～14）。体験指導員も常駐しており、体験の提供のための体制がある程度整っていると言える。

【写真 12】
火起こし体験

【写真 13】
土器炊飯

【写真 14】
弥生体験展示室（博物館１階）

この野外での本格的な体験と、館内での学習的な模擬体験の相乗効果により、来訪者は弥生時代の生活を肌で感じることができる。

弥生時代の遺跡で弥生時代の生活を体験できるということは、来場者にとって大きな魅力の一つとなり得る。

また、この体験を通して、弥生時代の生活等に対する想像を喚起し、余韻を楽しめるようにすることも重要である。

弥生時代の生活については、登呂を含めた各地の遺跡やそこからの出土品の調査・研究を通し、ある程度判明しているところである。しかし、例えば火起こしの方法が、本当に今体験してもらっている方法と同じだったかどうかは、弥生時代にタイムスリップでもしない限りわからないことである。

体験の際にこのようなことも伝え、「体験者それぞれの弥生時代」を思い描いてもらう余地を残すことで、来訪の余韻を楽しんでもらうことが考えられる。

≪登呂エリアの特別感を活かした新たな体験≫

前述したとおり、登呂遺跡は全国に３ヵ所しかない弥生時代の特別史跡であり、住宅地の中に忽然と現れる異空間である。

また、芹沢銈介美術館は、芹沢作品やコレクションの世界観を体現するような独特の空間を紡ぎ出している。

このような特別感を活かし、これまでにない体験メニューが提供できれば、登呂エリアの新たな魅力となり、これまで登呂エリアに興味がなかった人にも足を運んでもらう契機となり得る。

例えば、幅広い年代が楽しめるものとして、登呂遺跡でのキャンプ等による宿泊体験や自然観察、天体観測、水田復元エリアでの泥遊び体験などである。

【例】新たな体験メニュー

吉野ヶ里キャンプ（佐賀県）
・吉野ヶ里歴史公園において小学生とその親を対象にｷｬﾝﾌﾟｲﾍﾞﾝﾄを実施（写真：ｲﾍﾞﾝﾄﾁﾗｼより引用）

泥たんぼ祭り（山梨県都留市）
・自然に親しむプログラムとして泥たんぼ祭りを開催（写真提供：やまなし観光推進機構）

また、芹沢銈介美術館において、夜間の開館を期間限定で実施し、展示品保護の観点から普段は閉め切っているカーテン等を開けることで、展示品と併せ、庭園を含めた建物全体の魅力を体感できる機会を提供することも考えられる。

ウ　「いつでも」「誰でも」「何でも」楽しめる仕掛け

≪イベント等の会場としての積極的な活用≫

登呂エリアの賑わいを創出する手段の一つとして、イベント等の会場として活用することが考えられる。

ここでいうイベント等とは、登呂博物館や芹沢銈介美術館が実施する体験学習的な意味合いの強いものではなく、市内外からの集客力があり、その開催に係る費用を売上で賄えるような、収益性の高いものである。

そこに集まった人を登呂博物館・芹沢銈介美術館に呼び込むという点での連携は必要だが、あくまで実施主体は民間企業等であり、その発想を活かして新たな魅力を創出することが重要となる。

まずは社会実験的にイベント等の主催者を募り、徐々にその取組を広げていくなど、民間が参入できる仕組みを検討することが必要である。

また、大きなイベントでなくとも、週末などに「そこに行けば『何か』やっている」ということになれば、人が集まってくる。

現在、静岡市では「『まちは劇場』の推進」を「世界に輝く静岡」の実現に向けた５大構想の１つとして進めている。

これは、本市に根付いた大道芸や演劇、音楽などの芸術文化等の持つ創造性を活かし、誰もが気軽に楽しむことができる仕掛けづくりを通じて、市民の芸術文化等への参加や活動を促すことで、市民が主役のまちづくりを進め、シビックプライドの醸成及び交流人口の増加による地域経済の活性化を図るものである。

その取組の１つとして、市街地等でパフォーミングアーツ（大道芸、演劇、音楽など）を披露する場づくりを実施している。そのため、登呂エリアをパフォーミングアーツを披露する場の１つとして位置付けることで、賑わいの創出を図ることが考えられる。

【例】「まちは劇場」プロジェクト推進事業における取組

街中や公園などでパフォーミングアーツを展開

エ　日常的に様々な人が集える「サードプレイス」としての空間づくり

「サードプレイス」とは、地域コミュニティにおいて、自宅（ファーストプレイス）と職場・学校（セカンドプレイス）から隔離された、居心地のよい「第三の

居場所」を指す。

「サードプレイス」では、日常の煩わしさから解放され、思い思いに「自分らしい」時間を過ごすことで、普段の生活で抱えるストレスを発散することができる。また、多様で異質な人々が、自分の社会的立場等を気にせず気軽に交流できることから、新しいコミュニティが生まれる場所としても注目が集まってきている。

登呂エリアについても、「サードプレイス」として居心地のよい空間を作り出すことで、日常的に様々な人が集う地域コミュニティの核の役割を担うことができるのではないか。

例えば、弥生時代の景観を演出した上で、それを眺めて楽しみながら飲食ができるカフェやレストランを設置すれば、地域住民の方々が気軽に立ち寄り、ゆっくりと時間を過ごすとともに、観光客が旅の雰囲気に浸る場所となり得る。

【例】サードプレイスの理念を組み込んだ公園

南池袋公園（東京都豊島区）

・地域への愛着を他者と共有できる居心地のよいサードプレイスの場所を目指して整備
・カフェレストランも併設されている

（写真：南池袋公園パンフレットより引用）

登呂博物館３階の屋上テラスからは、遺跡全体が見渡せることに加え、天気がいい日には富士山も望むことができる（写真15、16）ため、これを景観が楽しめるテラス席等として活用することも考えられる。

【写真 15】
屋上テラス（登呂博物館３階）

【写真 16】
屋上テラスからの眺め

③地域に対する愛着を育む（「内」への仕掛け＝登呂エリアに関わる人づくり）

ア　郷土の誇りとしての存在感の醸成

≪小・中学校との連携≫

市民の登呂エリアに対する誇りを育むという点では、小・中学校における教育が果たす役割は大きい。

かつて登呂遺跡は、弥生時代の代表的な遺跡として、ほとんどの小学校の教科書に掲載されていた。しかし、より規模の大きな吉野ヶ里遺跡の発見（昭和61年、平成２年特別史跡指定）によって、吉野ヶ里遺跡の掲載が増えてきている。

一方、静岡市内の小学校については、弥生時代を学ぶ小学６年生時に、少なくとも８割から９割が社会科見学として登呂遺跡・登呂博物館を訪れている。

加えて、平成34年度（2022年度）の全市一斉スタートに向けて準備が進められている静岡型小中一貫教育においては、「しずおか学」として地域や静岡市に愛着を持つ子どもを育てる取組を実施する予定とのことである。

引き続き小・中学校と連携し、登呂遺跡・登呂博物館に触れる機会を設けてもらうことが重要である。

芹沢銈介美術館に関しては、市民の中でも芹沢銈介の認知度が低下してきているという課題がある。

以前小学校に配布したことのある芹沢銈介の紹介冊子（写真17）を、再度配布して活用してもらうなど、その存在感を高める取組が必要である。

【写真 17】
芹沢銈介の紹介冊子

また、登呂遺跡・登呂博物館と芹沢銈介美術館を「郷土の誇り」として捉えてもらうために重要なのは、それぞれが持つ本質的な価値を「物語」として伝えることである。

子どもたちに登呂エリアの「すごさ」や「おもしろさ」を感じてもらえるよう、伝え方を工夫する必要がある。

≪高校等との連携≫

市内の高校や大学、専門学校と連携し、登呂エリアで様々な活動をしてもらうことも手段の一つである。

例えば、既に以下のような取組が実施されている。

城南静岡高校地域貢献部の取組

・イベントにおいて、体験補助や準備のボランティアとして参加するほか、日本考古学協会の記念講演会関連イベントで弥生人の衣食住体験を行い、講演会において取組発表をした。

弥生時代の方法で
板材の製作

竪穴式住居内で調理

体験について講演会で発表

常葉大学の取組

・教育学部では、生物観察、登呂紙芝居・かるた・すごろくなどの博物館イベントに研究室単位で共催・参加している。

・造形学部では、遺跡広報プランの作成を課題に、フィールドワークや発表に取り組む研究室がある。

常葉大学造形学部の取組
（ロゴマークやポスターの考案）

これらの取組を他の学校等に広げていくとともに、地域住民や地元企業にも参画してもらうことで、地域における登呂エリアの存在感を高めていくことが考えられる。

イ　地域活動の場としての利用促進

登呂エリアに近い駿河区役所周辺地域は、「生涯活躍のまち静岡（ＣＣＲＣ）推進事業」において「駿河共生地区」と位置付けられ、地域福祉共生センター「みなくる」をはじめ、生涯学習センターや子育て支援センター、特別養護老人ホームなど、様々な施設がある（P. 25参考資料１「諮問事項説明資料　【駿河区】登呂エリア及びその周辺の概況（参考）」参照）。

また、市内には、自治会・町内会、ＮＰＯ法人、子育てサークルなど、様々な団体も存在する。

それらの施設や団体が活動する場所として登呂エリアを活用してもらうことで、

地域の住民同士や家族の絆を深めるとともに、地域への愛着を育む一助となることが期待できる。

【例】地域交流事業における活用

春の親子バスハイク（東京都品川区）

・青少年の健全育成と地域コミュニケーションの進展を目的に地区委員会が主催する事業
・平成29年度は金沢自然公園（横浜市）を訪れ、参加者はバーベキューや動物園を楽しんだ

（写真：品川区役所ホームページより引用）

ウ　地域主体の登呂エリアの価値の創造・発信

地域住民の方々に登呂エリアに対する愛着を持ってもらうためには、地域住民が主体となって登呂エリアの価値を考え、創り出し、発信していく機会を設けることが重要である。

そのための手法としては、本審議会が一つのモデルになり得るのではないか。本審議会には、金融機関代表、民間企業経営者、学識経験者など、様々な分野の委員が参画し、現地を視察した上で、それぞれが持つ知見や経験を活かして意見を出し合ったことで、多くの新しいアイデアが生まれた。

例えば、このような議論を多様な地域住民の方々が参加するワークショップとして実施し、歴史・文化資源について改めて学びながら、そのプロモーションの在り方について多角的に検討することが考えられる。

【例】市民参加によるまちづくりに関するワークショップ

区長とまちみがきセッション（静岡市駿河区）

・幅広い市民の方から意見聴取をすることで、市民主体のまちづくりにつなげるための取組
・平成30年度は駿河区に複数の大学があるという特性を活かし、大学生と「地域資源の活用」をテーマに検討を行い、新しい事業を提案してもらった

２　取組を進めるに当たってのポイント

ここまで、登呂エリアをモデルケースとし、歴史・文化資源の活用に向けた具体的な取組を提言した。

これらの取組を進める際には、以下の点について留意する必要がある。

（１）「目指す姿」の共有とその実現に向けた積極的な検討

今回、本審議会では、規制等の現実的な課題は一旦横に置き、まず登呂エリアを含めた歴史・文化資源の「目指す姿」を描いた上で、どのようなことに取り組めばその「目指す姿」に近付くかという視点から提言をまとめた。

その実現に当たっては、歴史・文化資源を所管する観光部局だけでなく、都市計画や教育など様々な部局の参画が必要不可欠となる。加えて、関係する部局が「目指す姿」のイメージを共有し、その実現に向けてそれぞれ何ができるかという積極的な姿勢で検討を行うことが重要である。

行政ならではの専門性やノウハウを結集し、さらに民間や地域の力を活用することで、先駆的な取組を生み出してほしい。

（２）民間参入を呼び込むための積極的な仕掛け

提言の実現に当たっては、行政の発想や資金だけでは到底足りず、民間活力をいかに活用するかが鍵となる。

そのためには、行政が積極的に民間のアイデアを取り入れ、ある程度自由に活動してもらえるようにすることが必要である。

例えば、民間のアイデアを取り入れる手法として、ある事業を実施する際に、仕様を作成する段階からサウンディングを行い、行政・民間双方にメリットのある内容を作り上げていくというものがある。

また、公の施設の使用許可についても検討が必要である。

公の施設は、条例でその設置目的が定められており、その目的以外に使用する場合は目的外使用許可を得なければならない。

しかし、条文上の設置目的が抽象的・概念的であるものも多く、どのような場合に目的外使用許可を得なければならないかがわかりにくい。また、許可が得られるかどうかの判断基準も明確に示すことが困難である。加えて、歴史・文化資源の中には、登呂遺跡のように文化財保護法の規制がかかっているものもあり、民間側からすると「何ができるかわからない」ため、利用するという発想に至らないのが現状ではないかと思われる。

この現状を打破するためには、行政側から「こんな風に活用できます」ということを積極的に打ち出し、活用を促すことが必要である。

（３）取組の実施主体の整理と役割分担

これらを実行に移していく際に課題となるのは、「誰がやるか」という点である。

上記（２）の冒頭でも述べたとおり、行政だけの力で地域活性化を図ることは困難であり、行政と民間、学校、地域住民等が、それぞれの役割分担の下で協働すること

が必要不可欠である。そのためには、歴史・文化資源の活用を経済（ビジネス）へつなげ、民間活力を呼び込むことを一つの目標としながら、郷土愛を原動力とした市民など、多くの担い手が生まれる過程が重要である。

さらに、例えば「民間」と一口に言っても、観光事業者やイベント事業者、ＮＰＯ法人など、その形態は様々だ。今回の審議会ではその議論にまで至らなかったが、取組の実施に当たっては、誰が実施主体となるのか、各実施主体にとっての課題は何かなど、「人」の側面からも検討を加える必要がある。

その上で、歴史・文化資源を取り巻く人々の連携＝ネットワークが構築できれば、歴史・文化資源の活用に向けた取組はさらに加速するものと考える。

以上、取組を進めるに当たってのポイントを述べたが、今後最優先すべきは、「まず何かやってみる」ということである。何かをやってみることで、初めて見えてくる優れた点や改善すべき点があるだろう。そこで見えた優れた点をさらに伸ばし、改善すべき点をすぐに改善してブラッシュアップしていくことができるかが、歴史・文化資源のみがきあげには重要となる。

いずれにせよ、「歴史文化施設」を中心としたネットワークの構築も含め、「歴史文化のまち」の実現に向けた取組は、静岡市にとって新しい挑戦となる。この答申がその後押しとなり、静岡市の活性化につながることを期待する。

参考資料

参考資料目次

参考資料１　諮問事項説明資料 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 23

参考資料２　登呂エリアの主な施設の現状

・登呂博物館・登呂遺跡 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 26

・芹沢銈介美術館 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 32

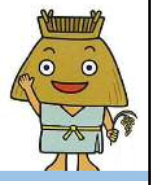
参考資料３　委員から提出された意見 ・・・・・・・・・・・・・・・・ 40

参考資料１　諮問事項説明資料

静岡市行財政改革推進審議会　諮問事項　説明資料

歴史・文化資源の活用及び
その周辺地域との連携による地域活性化について

～登呂エリアをモデルとした歴史・文化資源の活用方策～



【市全体】点在する歴史・文化資源のみがきあげ～歴史文化のまちの実現を目指して～

（仮称）静岡市歴史文化施設
（※）H33オープン

静岡浅間神社

登呂遺跡（特別史跡）

小島陣屋跡（史跡）

東海道広重美術館

三保松原（世界文化遺産）

久能山東照宮（国宝）

※（仮称）静岡市歴史文化施設建設基本計画より
　本施設は、**「歴史文化のまちづくり」の拠点の役割を果たす**ことで、国内外から多くの人々が訪れ、**活発な交流が行われるまちの実現**に貢献することをめざしていきます。そして、多くの人々が市内各地域に実際に足を運び、地域の人たちと交流する機会を創出することで、**地域活性化の一翼を担います。**

【審議対象】登呂エリアの現況

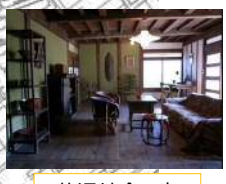
登呂博物館

芹沢銈介美術館

有料駐車場（51台）

ガイダンス施設

登呂遺跡公園



芹沢銈介の家

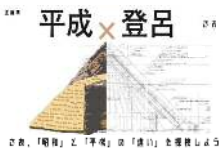
○特別史跡　全国で1,795件ある史跡のうち、「学術上の価値が特に高く、我が国文化の象徴たるもの」として、62件が指定されています（H29.11.1現在）。原始時代の遺跡では、他に三内丸山遺跡（青森県）、吉野ケ里遺跡（佐賀）等が該当します。

○用途地域：第一種住居地域（容積率200　建ぺい率60）
○高さ制限：最高高さ19m
○その他：都市公園法、博物館法、文化財保護法等の規制有

これまでの登呂エリアにおける取組

登呂博物館・芹沢銈介美術館による取組

○来館者数の増加を目指し、様々な展示・イベントを企画



▲新たな来館者の獲得に向け、各館で年に２～４回程度企画展を開催。
（※詳細は現地にて説明予定）

▲夏休み期間中などに主に小・中学生を対象とした各種イベントを開催。

▲過去には現代アートとのコラボレーションも。

市以外の団体等による利用

○住民団体等が年に数回イベントを開催

▲静岡×カンヌ×映画プロジェクト実行委員会による「シズオカ×カンヌウィーク」。期間中に登呂博物館、芹沢銈介美術館でもイベントを開催。

▲登呂会・登呂まつり実行委員会が毎年開催する「登呂まつり」。
登呂博物館も協力し、地域との関係性を強化。

▲その他、子ども会による田遊び（田植え～稲刈り）や地域の小学校による写生などに利用されています。

登呂エリアを取り巻く追い風と逆風

○文化財の保護から活用へ
国で、観光・地域振興、民間投資の促進のため、文化財の保護から活用に向けた検討がされている。

○市内歴史資源への注目
国宝に指定された久能山東照宮や世界文化遺産の構成資産である三保松原をはじめ、市内の歴史資源への関心が高まっている。

○登呂エリア周辺の開発が促進
平成31年の（仮称）静岡東スマートインターチェンジの供用開始に伴い、企業立地及び土地区画整理事業を推進しており、新たな人の流れが生まれてくる。

○駿河区の魅力づくり活動の高まり
登呂遺跡のゆるキャラ「トロベー」を駿河区唯一の公認応援隊長として、イベントに活用している。

○訪日旅行者数（インバウンド）の増加
清水港寄港客船及び静岡空港利用者が増加している。

○博物館や美術館の持つ集客力の限界
登呂博物館、芹沢銈介美術館ともに入館者数が減少傾向。また、目的外使用については限定的。

○全国的に知名度を上げる機会の減少
小学校社会科の教科書に登呂遺跡に関する掲載がされないものも出てきた。

○観光地としての動機付けの弱さ
学術的価値は高いものの、戦国時代のような魅力的なストーリーや著名な人物などが不明。

歴史文化資源を活用し、当該エリアへの交流人口を増加させ、地域活性化へと繋げる

【駿河区】登呂エリア及びその周辺の概況（参考）

参考資料２　登呂エリアの主な施設の現状

登呂博物館・登呂遺跡の現状について

1　施設名

登呂博物館、登呂遺跡

2　施設の目的

特別史跡指定を受け、国の象徴的文化遺産である登呂遺跡と、775点の重要文化財指定の出土品を有する博物館であり、史跡公園に位置付けられている。現在は、発掘調査によって明らかにされた稲作農耕文化と、発掘調査がもたらした社会的・学史的意義を中心テーマに据え、博物館内と遺跡内で展示、教育普及活動を展開している。

3　設置年度

昭和27年 遺跡が国の特別史跡に指定　昭和30年 静岡考古館（博物館の前身）開館、昭和47年 登呂博物館開館、平成22年 登呂博物館リニューアルオープン

4　施設運営形態

直営

5　施設面積・形状（写真や図面）

施設の概要

遺跡内に、再発掘調査の成果を基に、再整備事業にて住居４棟、高床倉庫２棟、祭殿１棟、住居跡及び水田を復元している。また、再整備前に復元されていた住居１棟、高床倉庫１棟、住居跡をメモリアル広場として整備している。火起こし体験や土器炊飯試食、復元水田での稲作体験などができる。

登呂博物館には、２階に登呂遺跡の出土品を展示する「常設展示室」、登呂遺跡に係わらずテーマを定めて展示する「特別・企画展示室」、１階には、とろムラを再現し、弥生時代の様々な体験ができる「弥生体験展示室」や、「登呂交流ホール」、「情報コーナー」、「図書コーナー」がある。屋上には遺跡を一望できる「展望コーナー」がある。なお、登呂遺跡・登呂博物館は都市公園である登呂公園の中に位置している。

博物館入館料、遺跡見学料　無料

博物館２階観覧料　一般300円　高・大学生200円、小・中学生50円

（団体料金、回数券、芹沢銈介美術館との共通券あり）

遺跡全景

復元祭殿

火起こし体験

博物館全景

常設展示室

弥生体験展示室

６　年間利用者数

（単位：千人）

年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度
博物館 入館者数	183	184	186	184	167
博物館 観覧者数	47	43	42	45	41

７　コスト

（単位：千円）

年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度
歳入	5,387	8,301	9,619	12,720	13,436
歳出	90,641	112,917	113,464	121,261	130,694

８　主な利用実績（活用方法）

１　施設の利用概要・課題等

博物館は、１階の無料部分に体験学習の場となる弥生体験展示室、２階の有料部分に重要文化財の展示がある常設展示室、年４回の企画展示の場となる企画展示室がある。

主催の講座・イベントは、市民参加による遺跡の水田での米づくり体験、企画展関連講演会、夏休みの子ども向けイベント等、年間22回(H29)、共催事業は、大学連携のイベント、シズオカ×カンヌウィーク他、年間13回(H29)開催している。また、教育施設として小学校の社会科学習や歴史学習などの見学を毎年多数受け入れているほか、全国の大学における学芸員資格取得課程における博物館実習や、市内中学生の職業体験実習、インターンシップなどにも積極的に関与し、その社会的役割を果たしている。

２　広報活動・取材記録

テレビ、ラジオ放映が14件(H29)、新聞掲載は43件(H29)、有料雑誌広告は13件(H29)、無料広告は、28件(H29)、ウェブサイト等36件(H29)

イメージキャラクターの「トロベー」の貸出を年間27回(H29)

３　ボランティアによる活動

体験展示室での展示解説ほか、イベント補助や水田活動、施設見学研修参加等、45名の登録者(H29)が日常的に精力的に活動している。

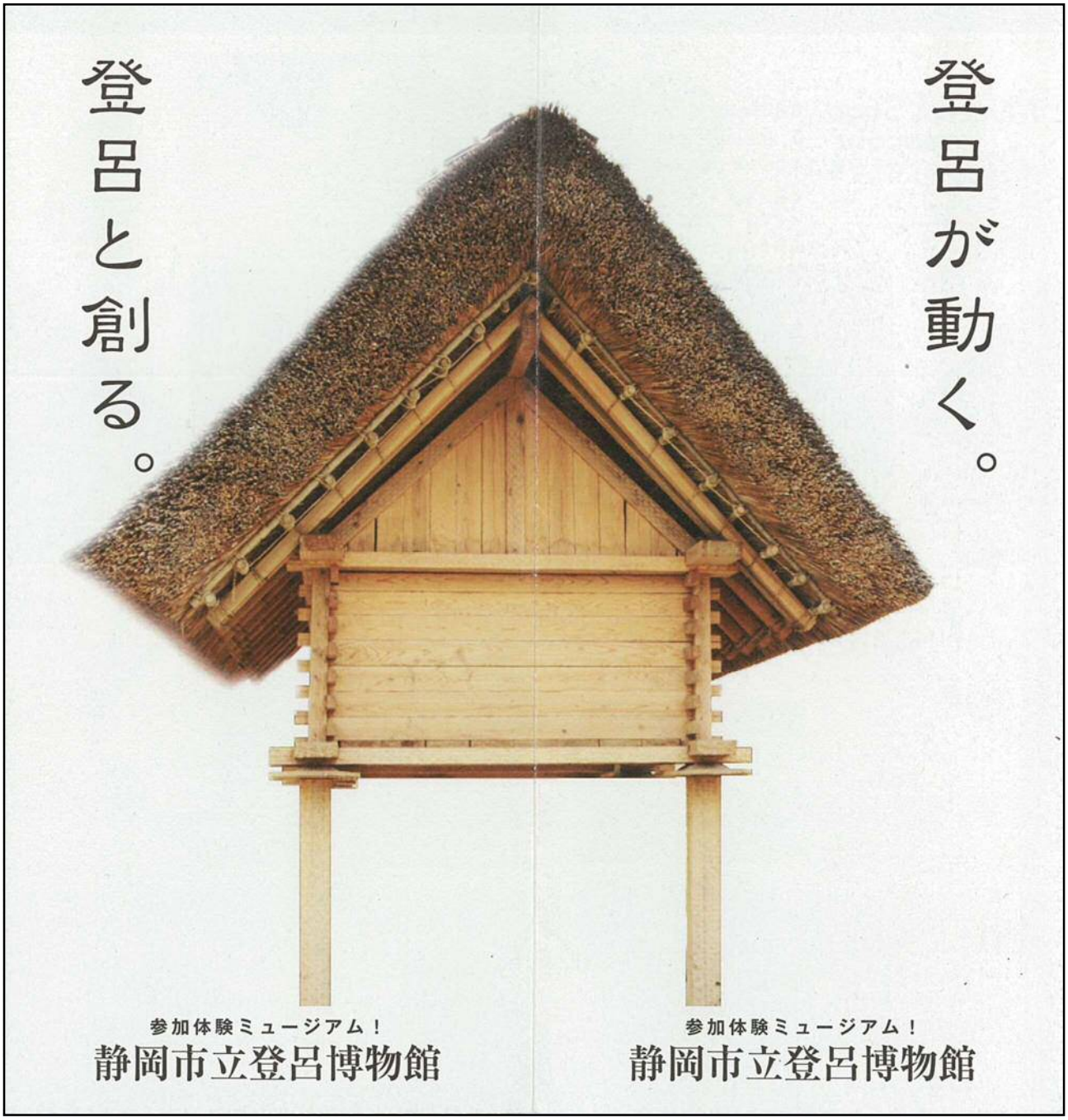
４　音声ガイド

平成30年より、インバウンド需要に対応するため、無料の音声ガイド20台を導入。日本語、英語、中国語、韓国語の4か国語に対応。

5　地域との連携

地元「登呂会」と呼ばれる自治会を母体とした地域団体が主宰する「登呂まつり」の開催に協力し、登呂遺跡・博物館が地元の誇りであることを再認識していただく機会としている。

≪登呂博物館パンフレット≫

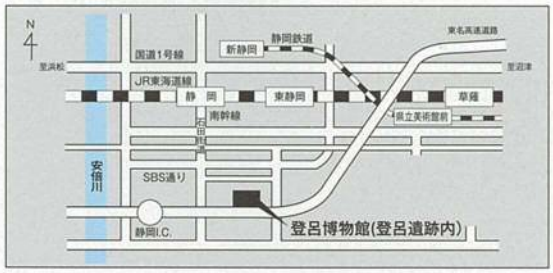


登呂博物館

登呂遺跡内にある遺跡と一体化した博物館。遺跡から出土した貴重な遺物を展示公開し、また、弥生時代をリアルに感じられる体験学習も行っています。1階は無料スペースでどなたでも入場可能。交流ホールや情報コーナーなど、人や地域とのふれあいも重視し、様々なイベントや企画も行っていきます。

施設概要

開館時間／午前9時～午後4時30分
休 館 日／月曜日／祝日の翌日／年末年始
観 覧 料／一般 300 円　高・大学生 200 円　小・中学生 50 円
※団体券、回数券、芹沢銈介美術館との共通券あり
※特別展開催中は特別料金
交　　通／JR静岡駅南口から
バス：『登呂遺跡』行き終点下車（約12分）
タクシー：静岡駅南口から登呂公園へ（約10分）
車：静岡I.C.より約10分
駐 車 場／登呂遺跡南側に有料駐車場があります
問合せ先／静岡市立登呂博物館
静岡市駿河区登呂五丁目10番5号
電話 054-285-0476



登呂遺跡の概要

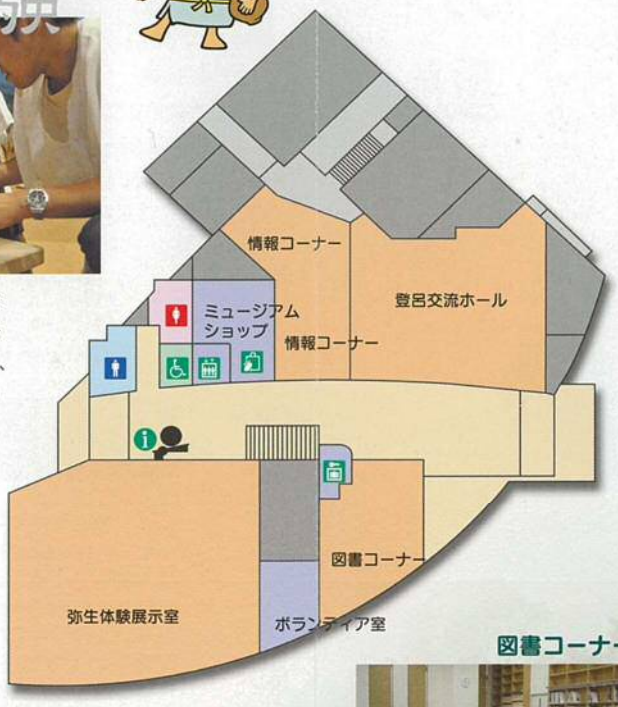
登呂遺跡は、太平洋戦争中の昭和18年、軍需工場建設中に発見され、弥生時代の遺跡であることがわかりました。戦後の昭和22年から25年にかけて本格的な発掘調査が行われ、遺跡からは土器をはじめ木製の容器や農具が出土し、住居や米を保管する高床倉庫の跡、さらに8ヘクタール以上の広大な水田域が確認されました。
弥生時代後期の農村の姿をよく表す遺跡として、昭和27年に国の特別史跡に指定され、その後、住居や倉庫と水田の復元を中心とする史跡公園として整備されました。
平成11年から15年まで再発掘調査が行われ、棟持柱がそえられた祭殿と考えられる大型の掘立柱建物跡や、集落と水田域を区画する溝など新しい情報が得られました。
そして、その成果をもとに平成23年度まで再整備が行われ、登呂ムラ全体の姿がより詳細に復元されました。

遺跡

1F

体験

火おこし・ものづくり・田植えなど体験学習を行うことができ、復元された住居や祭殿の中に入り、弥生時代をたっぷり満喫することができます。



Museum Shop

登呂遺跡についてもっと知りたくなったら

登呂博物館ミュージアムショップは、登呂遺跡をさらに楽しくする考古学専門のお店です。登呂遺跡を楽しむグッズや、土器・銅鐸などのレプリカ、自由研究にも最適な体験グッズや書籍も充実。弥生時代を中心に、縄文から古墳時代の考古学グッズを幅広く取り扱っています。

情報映像コーナー

登呂博物館が所蔵する遺物の検索や、静岡市内の観光案内など様々な情報を発信するコーナーです。

図書コーナー

図書コーナーでは、登呂遺跡にまつわる資料の他、全国の博物館の図録等も見ることができます。お気軽にご利用ください。

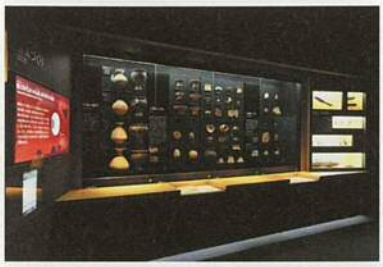
弥生

弥生体験展示室

住居、高床倉庫、祭殿、水田が再現されており、利用者は弥生時代の衣服を着て、弥生時代へタイムスリップしたかのような体験を味わえます。

2F

常設展示室 登呂遺跡から出土した実物資料を中心に、登呂ムラの人々の生活の様子を模型やパネルを使って展示しています。



遺物

昭和18年の登呂遺跡の発見から調査、整備の歴史を解説し、発掘に関わった人々のインタビュー映像や当時の新聞記事などを閲覧できます。

再現

登呂ムラを再現したミニチュアや、登呂遺跡にまつわるクイズを出題するトロベークイズなど展示と合わせて楽しめるコーナーも設置。

芹沢銈介美術館の現状について

1　施設名

芹沢銈介美術館

2　施設の目的

芹沢芸術を永く後世に伝えるとともに、美術に関する知識の向上と文化の発展に寄与するため、芹沢銈介の型絵染、絵画、絵本、陶器等の作品及び美術コレクションの展示及び保管を行う。
芹沢関係資料に関する専門的調査、展示及び保管についての技術的研究、教育普及活動等を実施するとともに、他美術館・学校・図書館・生涯学習施設等の教育・学術・文化に関する諸施設と協力し、その活動援助を行う。

3　設置年度

昭和56年度（昭和56年6月15日オープン）

4　施設運営形態

市直営

5　施設面積・形状（写真や図面）

・敷地面積　4,284.06㎡
・建物床面積　美術館（石水館）　1,261.58㎡　鉄筋コンクリート造銅板葺平屋建
　　別館収蔵庫　405.5㎡　鉄筋コンクリート造二階建
　　芹沢銈介の家　106㎡　木造二階建

※美術館（石水館）の詳細は別添のパンフレットのとおり

6　年間利用者数

（単位：千人）

年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度
人数	17	19	19	18	17

7　コスト

（単位：千円）

年度	H25年度	H26年度	H27年度	H28年度	H29年度
歳入	5,688	7,295	7,481	6,422	6,562
歳出	38,413	40,790	42,025	40,728	40,651

※歳入は、観覧料収入と各種発行物販売収入の合計

8　主な利用実績（活用方法）

1　展覧会

年３回の展覧会を実施。

各展覧会の間に展示替え期間（休館）を設け、すべての展示を入れ替える。

平成29年度　①芹沢銈介と沖縄ー明るく、静かで、深いものー
②のれんー芹沢銈介の原点ー
③芹沢銈介の収集ー手仕事の世界地図ー

2　教育普及事業など

29年度

・生涯学習センターへの事業協力（講座１回）
・呈茶事業（15回）
・ワークショップ（12回）
・「芹沢銈介の家」２階の見学会（4回）
・講師派遣（生涯学習交流館・高等学校など4回）
・学芸員によるギャラリートーク（6回）
・クイズラリー（開館中毎日実施　参加2,458人）
・芹沢関係資料展示（外部施設1回）
・図録の作成（2種2,700部）
・博物館実習

3　来館者アンケート

満足度（アンケートにおいて、当館について「満足」と回答されたもの）

29年度　97.5%（総回答数1,964件）
28年度　98.8%（総回答数2,200件）

4　その他

フォトウェディングでの利用

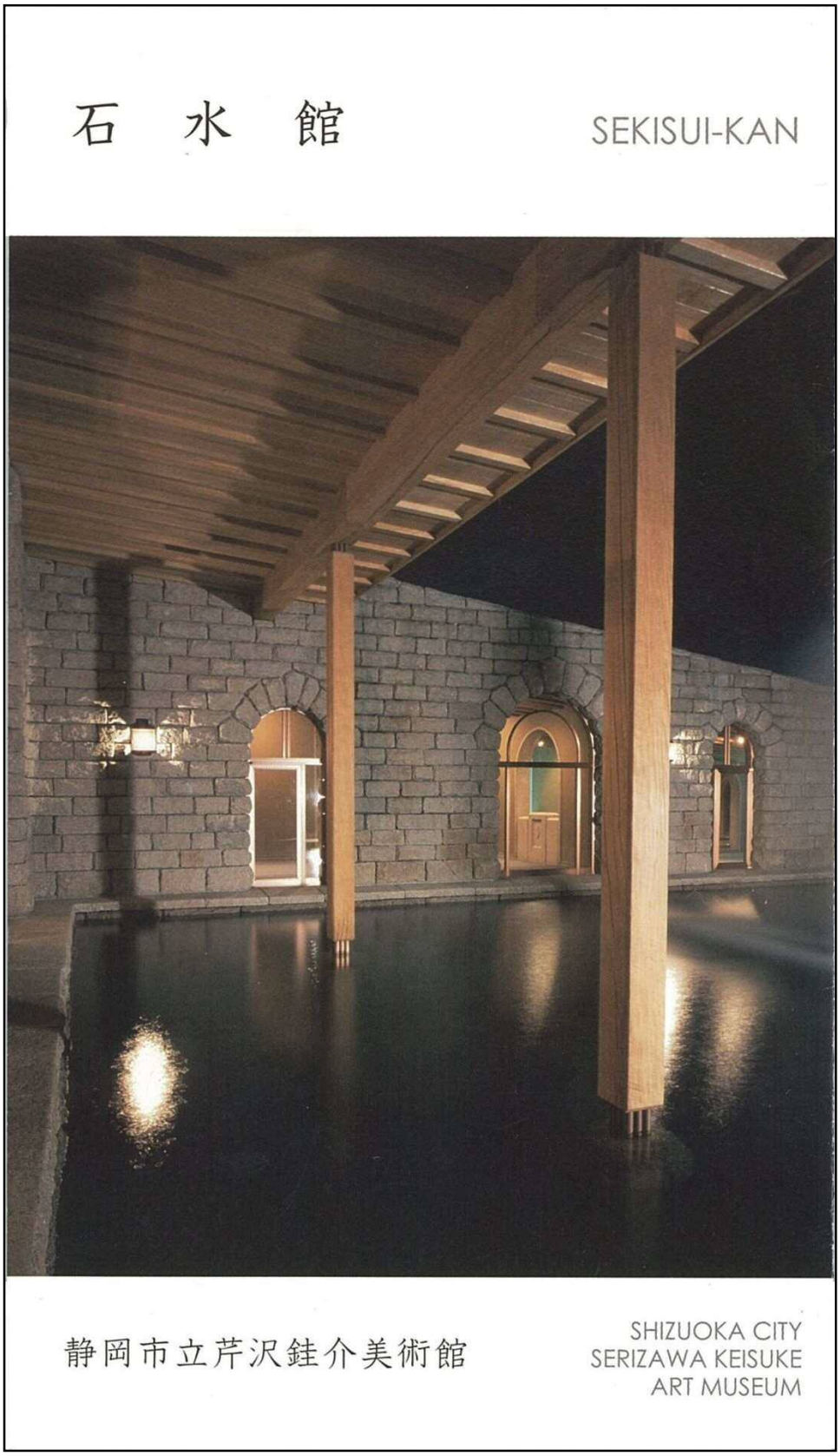
青少年育成課の事業、しずおかエンジェルプロジェクト「フォトウェディング静岡」の撮影スポットとしてロケーション撮影に利用した。（29年度　２回）

5　課題等

アンケートでは、多くの満足の回答を得ているが、来館者数は減少傾向にある。

展覧会やワークショップ、講演会等の教育普及事業をより充実し、また、学校や交通機関、旅行社等へ美術館のPR等をさらに行い、来館者数の増加を図りたい。

≪芹沢銈介美術館（石水館）パンフレット≫



弥生時代の遺跡として名高い登呂遺跡公園の一隅に位置する静岡市立芹沢銈介美術館は、染色家・芹沢銈介（1895～1984）より、郷里の静岡市に作品とコレクションが寄贈されたのを機に建設されました。

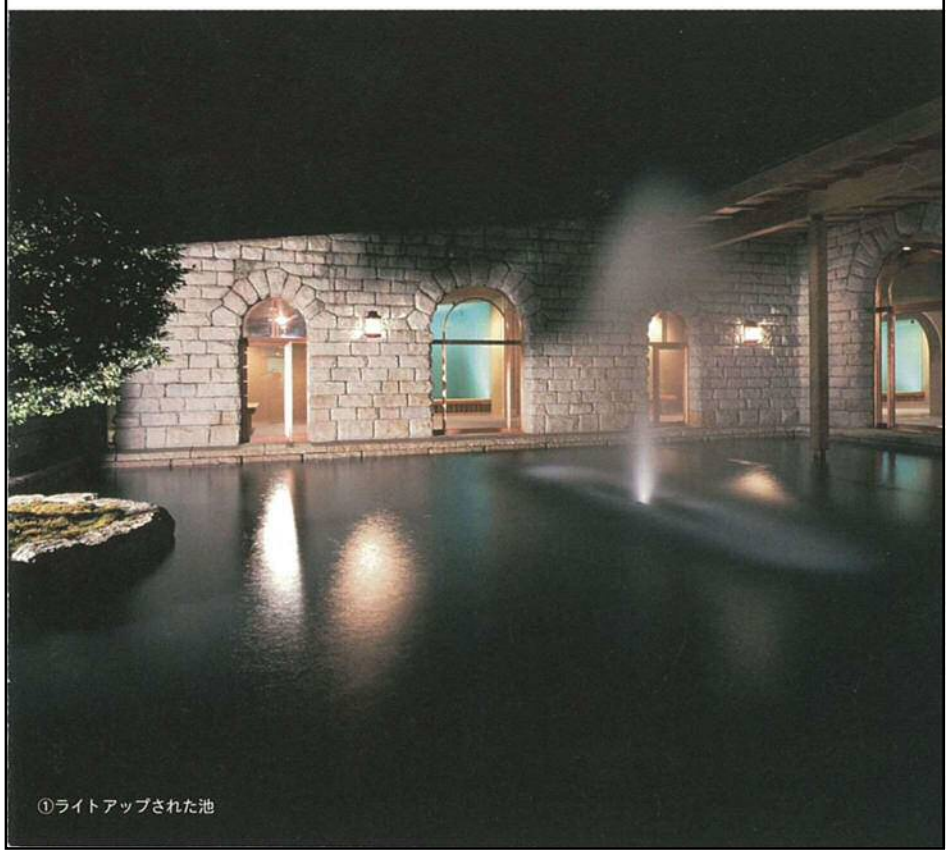
芹沢銈介は、自らの作品とコレクションを収蔵する施設をつくるにあたり、水原徳言氏の紹介をえて、白井晟一に設計を依頼しました。芹沢は設計のすべてを白井に委ね、白井はその信頼に応えるべく真摯な態度で設計に臨みました。

白井はこの建物を、自身がもっともこのんだ京都・高山寺の石水院にちなんで「石水館」と命名、登呂遺跡の雰囲気に自然に溶け込むように、石や木、水といった天然素材で構成しました。石を積み上げた量感ある外壁。ゆるやかな銅版葺きの屋根。そして銑とよばれる手斧の跡を残す白木の楢材の組天井をもつ展示室が池を巡るように配されています。芹沢芸術の鑑賞の場にふさわしいゆったりとした空間を演出しています。

平成10年には建設省の「公共建築百選」のひとつにも選ばれています。

このパンフレットは、開館直前（1981年4月）と、近年撮影された写真で構成されています。

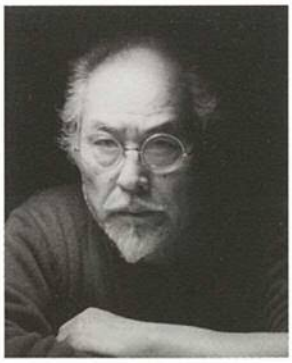
静岡市立芹沢銈介美術館



①ライトアップされた池

白井晟一 (1905–1983)

Shirai Seiichi



京都市生まれ。京都高等工芸学校に入学、そのかたわら京都大学哲学科に通いマルクス主義哲学者の戸坂潤らと親交を結ぶ。

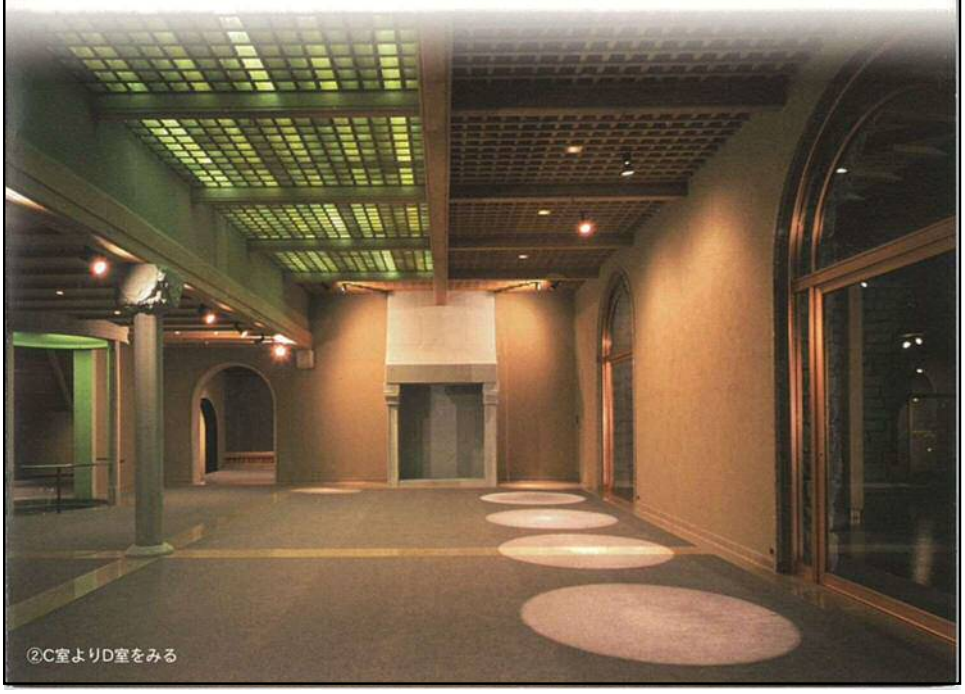
1927年ドイツに留学、ベルリン大学、ハイデルベルク大学でヤスパースらに師事し、かたわらゴシック建築を学ぶ。パリでは、アンドレ・マルロー、イリヤ・エレンブルグ、そして丁度パリ在住の作家林芙美子らと交流した。

1935年義兄の日本画家近藤浩一路の住居を手がけてから建築に専念し、「河村邸(1936年)」「歓帰荘(1937年)」「嶋中山荘(1941年)」などを設計した。

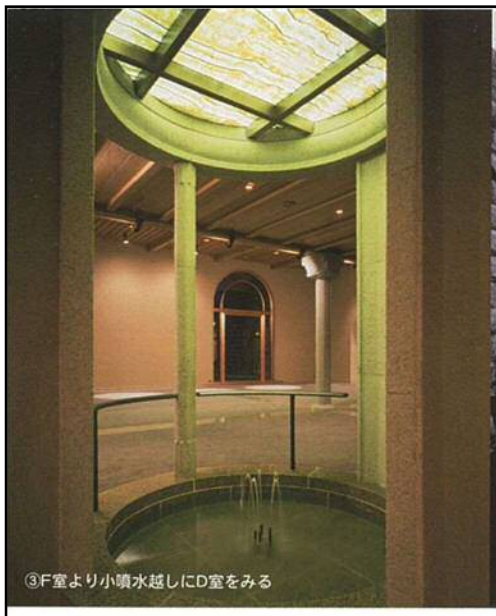
戦後、秋田の「秋ノ宮村役場(1951年)」、群馬の「松井田町役場(1956年)」など地方の風土文化に根ざした建築で注目をあびる。

1955年「原爆堂計画」で日本の現代建築に精神性を求める作風の基礎を築いた。1958年「浅草善照寺」で高村光太郎賞を受賞。1963年から親和銀行各支店の設計を手がけ、代表作佐世保本店「懐霄館(1975年)」で建築学会賞、毎日芸術賞を受賞。一方1965年には富山に「呉羽の舎」を建て、和風建築に創造性を発揮する。1974年及び1978年に作品集(中央公論社及び世界文化社)を出版、また書をよくし、三冊の書帖が出版された。装幀家でもあった。1978年からは南洋堂出版から「白井晟一研究」が出版される。1980年日本芸術院賞を受賞。同年「渋谷区立松濤美術館」、1981年静岡市立芹沢銈介美術館「石水館」を設計。

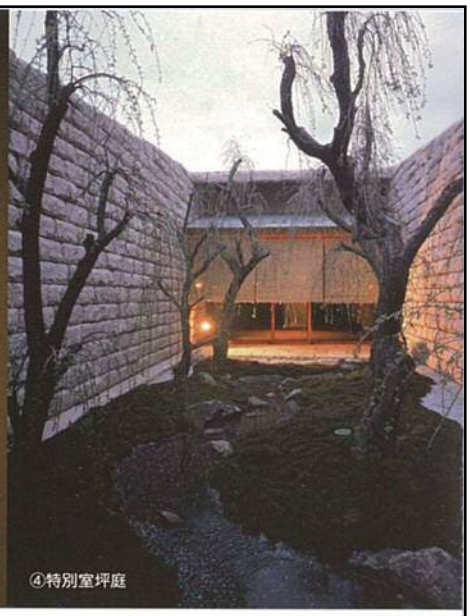
1983年11月22日京都嵯峨野にて死去。享年78歳。死後、1988年に白井晟一全集(同朋舎)が発行されている。



②C室よりD室をみる



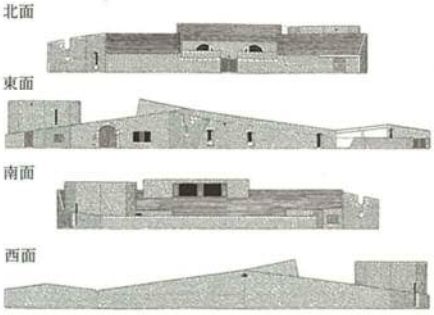
③F室より小噴水越しにD室をみる



④特別室坪庭

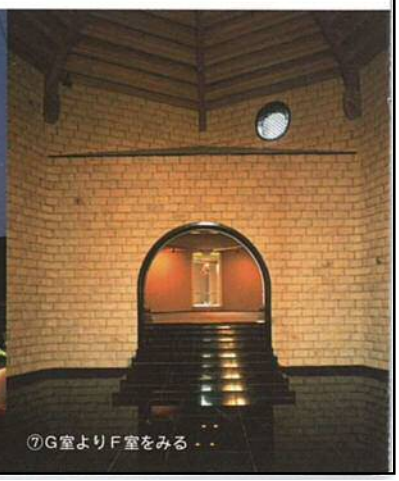
平面図

立面図



①～⑨撮影：三輪晃久（1981年）

⑥美術館の外、南西の角より外壁をみる。手前の塔はG室



⑦G室よりF室をみる

⑤池

施設概要

建築名	静岡市立芹沢銈介美術館（石水館）
所在地	静岡市駿河区登呂五丁目10番5号
構造	鉄筋コンクリート造銅版葺平屋建
設計	白井晟一研究所
建設施工	大成建設株式会社
竣工	1981年5月
敷地面積	3,799㎡
建物床面積	1,261.58㎡
展示室	(10室) 676.62㎡
軒高	5.449m～6.849m
天井高	2.6m～6.4m

主な外部仕上

屋根	銅版一文字葺緑青仕上
外壁	紅雲石割肌野積
建具	銅製サッシュ
塀	紅雲石割肌野積
前庭・坪庭	金木犀、しだれ梅、寒椿、ほか

※紅雲石とは、韓国産の赤御影石のこと。無名であったため、白井晟一が命名した。

施設内容

A展示室	68.00㎡	映写室	22.40㎡
B展示室	23.00㎡	収蔵庫	81.60㎡
C展示室	70.00㎡	事務室	55.27㎡
D展示室	140.00㎡	特別室	53.10㎡
E展示室	60.00㎡	化粧室	43.04㎡
F展示室	87.75㎡	機械室	43.35㎡
G展示室	66.07㎡	入口ロビー	47.00㎡
H展示室	60.00㎡	ロッカールーム	30.00㎡
I展示室	41.80㎡	インフォメ	12.00㎡
J展示室	60.00㎡	廊下	42.00㎡
研究室	70.00㎡	出口その他	85.20㎡

展示室内部仕上

天井	楢板貼　楢は木曽・飛騨産 天井張りは、柚工房（早川謙之輔） D室格子・小噴水天井、G室天井はオニキス石
壁	デュッセル（砕石入アクリルリシン）
床	ジュータン
ボーダー・巾木	紅雲石本磨
F、G室の黒石	インド産黒御影石本磨
D室八角柱、化粧暖炉	白丁場石
池底石	中国産玄晶石

⑧E室よりF室をみる（奥はG室）　⑨A室（奥はC室）

展示風景（G展示室）

きんもくせい（前庭）

寒椿（噴水前）

展示風景（C展示室）

しだれ梅（坪庭）

観覧料

一般 420 円、高・大生 250 円、小・中生 100 円、未就学児無料
（団体割引 30 名以上 50 円引き、小中生は 20 円引き）
※市内在住の小・中生及び 70 歳以上の方、身体障がい者手帳等の交付を受けている方とその介助者1名は無料

開館時間等

開館時間 ＝ 9:00 ～ 16:30
休 館 日 ＝ 月曜日、祝日の翌日、年末年始、展示替期間中

交通

バ　　ス ＝ 静岡駅南口㉒バス乗り場から「登呂遺跡」行き乗車、約12分終点下車
タクシー ＝ 静岡駅南口から登呂公園へ … 約10分
東名高速 ＝ 静岡インターより約10分
駐 車 場 ＝ 登呂公園南側に駐車場があります

静岡市立芹沢銈介美術館

〒422-8033 静岡市駿河区登呂5-10-5 TEL054-282-5522
http://www.seribi.jp

《表紙の写真》
ライトアップされた池
撮影：三輪晃久（1981年）

参考資料３　委員から提出された意見

登呂エリアの「優れている点」・「改善すべき点」

	優れている点
エリア全体	【規模】 ・コンパクトな遺跡（吉野ヶ里遺跡と比べると）。 ・水田跡、復元家屋、芹沢美術館、博物館がコンパクトにまとまっている。 ・芹沢美術館と登呂遺跡をセットで見ることができる。 ・遺跡がコンパクトに集約されており、箱庭的なイメージで、親しみやすい。
登呂遺跡公園	【特別史跡としての価値】 ・歴史の教科書に記載、国の特別史跡(1952年)に認定され歴史がある。 ・弥生時代遺跡の御三家（登呂、吉野ヶ里、原の辻遺跡（壹岐））である。 ・弥生時代の水田跡、高床式倉庫、竪穴式住居などが再現、復元され残っており、学術的にも貴重な遺跡である。 ・国の特別史跡に指定されている。 ・全国に３か所しかない弥生時代の特別史跡で、30代以上の世代にとっては、弥生時代＝登呂遺跡（古代の遺跡＝登呂遺跡）の圧倒的なブランドイメージがある。歴史で最初に習うため、誰もが覚えている。 ・登呂遺跡は歴史文化資源としての価値が高い。 【充実した体験メニュー】 ・火起こし等の体験実演。 ・水田の栽培・収穫実習を実施できる。 ・火おこし体験や機織り体験など、体験できるブースが充実している。 ・登呂遺跡で子供たちが古代米の田植え・刈り込み体験ができること。 ・田んぼ、復元家屋には自由に入ることができる。 ・水田が復元されており、「日本の農村の原風景」が表現されている。古代米が栽培され、農作業体験もできる。火起こし体験や赤米の土器炊飯などの古代の日常生活体験もできる。 【充実したボランティアガイド等】 ・ボランティアによる解説がある。 ・説明してくれる方の知識が豊富。 ・以前見た復元家屋と現在の物との違いが「説明を頂いて」理解できた。 ・インバウンド需要に対する音声ガイドが対応できている。 【恵まれた景観、自然環境】 ・富士山が見える。 ・天気が良ければ屋上から富士山が見える。 ・コウノトリが降り立つほどの自然環境に恵まれている ・ザリガニやトンボが採れる。 【イベントの開催等による活用】 ・様々なイベントが開催されている。（特に、カンヌウィークでの野外上映は素晴らしい） ・屋外イベントができる。 ・「場の力」を感じる。祭殿もあり、屋外イベント会場としての活用可能性が高いのではないか。キュウソネコカミのミュージックビデオの撮影ロケとして活用された。 ・「とろエンナーレ」の発想はよい。古代×現代アートで、市域全体にネットワーク化して広げると、大化けする可能性あるのでは。 【地域との連携】 ・地元「登呂会」との連携が出来ている。

改善すべき点
【規模】 ・コンパクトを生かしきれていない（吉野ヶ里遺跡と比べると）。 ・敷地が広く感じられ、コンパクトにまとまっている方が見やすい。 ・駐車場を含めて敷地・キャパシティが小さい。 【情報発信】 ・どの年代を主なターゲットにしているか不明。 ・全体を回遊誘導するマップや資料が欲しい（すでにあるかもしれませんが）。 【集客】 ・博物館、美術館の特別展以外にリピート訪問の動機が少ない。 ・見て回るところが少ない。 ・天候に左右される。 ・登呂遺跡・博物館と芹沢美術館の来場者層がリンクしない。館の性格の違いがあるにせよ、両館を含め敷地全体を一体的に見せ、両館への入館を促進したい。
【特別史跡としての存在感の希薄化】 ・歴史の教科書から外れてきている。 ・20代以下の世代にとっては、吉野ケ里遺跡（1991年特別史跡指定）、三内丸山遺跡（2000年特別史跡指定）の方がむしろ知名度は高い。古代の遺跡におけるワンオブゼムであり、覚えていない人もいる。 ・登呂遺跡の意義（※）の情報発信。 ※神国日本の歴史が否定されて自信を失っていた戦後直後の日本において、米作の日本文化の源流を明らかにしたムラ（住居跡、水田、水路等）が丸ごと出現し、日本国憲法の公布の際の昭和天皇の国会での詔勅にある「文化国家の建設」への第一歩となったこと。裁判官がヤミ米を食べずに餓死する時代に、全国的な請願運動を受けて、国会主導で食料予算ではなく遺跡発掘を予算化したこと。戦後の日本の考古学会をリードした若手研究者が活躍し、静岡市の高校生や先生方がボランティアで活動したこと。 こうした、登呂遺跡をめぐるエピソードを漫画やイラストで紹介し、ストーリとしてSNSも含めて情報発信する。 【集客】 ・登呂遺跡、芹沢銈介美術館ともに、こちらを目的としての来訪を増やすべき。 ・登呂遺跡・博物館と芹沢美術館の来場者層がリンクしない。館の性格の違いがあるにせよ、両館を含め敷地全体を一体的に見せ、両館への入館を促進したい。 【活かされていない景観】 ・富士山の活用ができていない。 【イベントの開催】 ・シズカン以外にも屋外イベントを開催する。

	優れている点
登呂博物館	【充実した展示内容等】 ・登呂遺跡から発掘された出土品や研究成果を展示する体験型ミュージアムとして、貴重な博物館である。 ・土器・木器・石器・石製品　・金属製品 の出土品が多く、重要文化財多数で玄人受けする。 ・博物館美術館の展示物が大変貴重なものばかりである。 ・縄文時代から弥生時代に至るまでの農業や生活の移り変わりがわかる資料が展示されている。 ・博物館の１階体験型と２階見学型が分かれていてコンセプトがはっきりしている。 ・１階の体験型の展示、企画展示、1階の他の遺跡の紹介コーナー。 ・博物館１階には自由に入ることができる。 ・図書コーナーにある県内の遺跡の発掘資料。 【恵まれた景観】 ・博物館屋上からの展望。 【ミュージアムショップの内容】 ・売店にある特産品の品揃え。 【施設の管理状況】 ・管理者が各場所に適切配置されている。
芹沢銈介美術館	【充実した収蔵品等】 ・人間国宝・芹沢さんの作品、収集品を展示する施設としては貴重な美術館である。 ・博物館美術館の展示物が大変貴重なものばかりである。 ・芹沢銈介美術館は小さいながら所蔵品の質と量が高く、民藝ファンには人気の美術館。 ・収蔵作品そのもの。 ・芹沢銈介氏の作品はどれも大変素晴らしい。 ・芹沢さんの家も、当時のまま保存されていて、興味深い。 ・良い雰囲気があり、満足感が大きい。 ・平日でもそれなりの来館者があり、知る人ぞ知る存在。美術館としての価値は高い。生家も大事に保存されており、地元の人に大切にされている印象がある。 【優れた建築物としての美術館】 ・建物だけでも観光の対象になる。 ・芹沢銈介美術館は建築的に大変素晴らしいデザインである。 ・中庭が見える部屋。 ・白井晟一氏の設計による建物自体もとてもユニークで、集客力がある。フォト・ウェディングのアイデアはよいのでは。 【ミュージアムショップの内容】 ・芹沢銈介美術館のお土産ショップはお洒落な商品が数多く置いてある。 【教育】 ・教育普及事業が充実している。
交通手段	【自動車によるアクセス】 ・駐車場が完備されている。（来場者のアクセス60%が自動車） ・現在建設中のスマートインターに近い。 ・東名静岡東スマートインターチェンジの整備により、東名からのアクセスが向上し、東京方面からの集客増につながることが期待できる。 【公共交通機関等によるアクセス】 ・静岡からバスで約20分、東京、名古屋、関西にも近く県内各地からも需要がある。 ・交通至便で立地がよい。

改善すべき点
【入館者数の減少等】 ・年間入館者数が減少している。 ・入場者が16.7万人で、うち有料者数が4.1万人(1/4)と少ない。 ・登呂博物館に来館する方の内、観覧しない方が37%もいること。 ・登呂博物館の歳入が歳出の10%程度で少ない。 ・インバウンドも200人/年程度で少ない。 ・博物館が有料。 ・16:30で閉館では早い。 ・登呂遺跡、芹沢銈介美術館ともに、こちらを目的としての来訪を増やすべき。 ・１階無料スペースがあるため、かえって有料部分に到達しない来館者があるのではないか。 【集客】 ・登呂遺跡・博物館と芹沢美術館の来場者層がリンクしない。館の性格の違いがあるにせよ、両館を含め敷地全体を一体的に見せ、両館への入館を促進したい。 【ミュージアムショップの内容】 ・売店がお粗末。トロベーグッズの販売も含めて商品の見直し、商品パッケージの見直しが必要。 【施設の活用】 ・登呂交流ホールが殺風景な空間になっているなど、施設の使い方が残念なところがあった。大学生に空間のプロデュースを任せるなどしてみてもよいのではないか。トロベーもゆるキャラとして今一つ頭抜けていないところがあり、大学生の力を借りるなどしてもよいのでは。 ・施設内の利用について、公共施設、教育施設としての制限があり、魅力的な空間利用ができにくいのではないか。 【海外旅行客への対応】 ・展示物の説明とホームページが日本語のみ。英語の説明とHPの英訳。
【入館者数の減少等】 ・登呂博物館に隣接しているにも関わらず、入館者数が少ない。 ・芹沢美術館の歳入が歳出の16%程度で少ない。 ・16:30で閉館では早い。 【集客】 ・登呂遺跡、芹沢銈介美術館ともに、こちらを目的としての来訪を増やすべき。 ・登呂遺跡・博物館と芹沢美術館の来場者層がリンクしない。館の性格の違いがあるにせよ、両館を含め敷地全体を一体的に見せ、両館への入館を促進したい。 ・登呂遺跡との関連性はない。客層も全く異なる。コアなファンはいるが、数は少なく、集客施設としての核にはなりづらい。 ・認知度が減少している。 　芹沢美術の愛好家には貴重な存在であるが、一般の方がどれだけ興味を持っているのか不明確である。 　開館当時は、芹沢美術の殿堂として話題になったが、現在は開館から年数も経ち、その価値を理解している方が減少しているのではないか。 　年代の高い方は芹沢さんを知っているが、若い方はどれだけ知っているのか疑問である。 ・誰のための美術館なのか？美術館の独りよがり（芹沢銈介の作品があり、設計者も含めすばらしい美術館、芹沢が世界各地で集めたコレクションの価値は、市民や静岡市訪問者には伝わっていない）。 ・ワークショップの開催場所がお粗末。もっと利用者・入館者に優しく。（登呂博物館１階の会場を利用できないか？） 【活かされていない建築物としての魅力】 ・芹沢美術館を建物自体としての活用ができていない。 ・作品展示と建物を双方活かせる方法を検討。 ・作品保護のために建物を活かせていないのはもったいない。期間限定でよいので、建物メインの展示・貸出をすることも検討してもいいのでは。 ・建物については、美術館としての用途を優先すると、建物としては鑑賞しづらくなる面があり、活用上の課題となっている。 【ミュージアムショップの内容】 ・ミュージアムショップの商品をもっと魅力的なものに。ディスプレイの仕方もダサい。 【収蔵品の管理】 ・収蔵品の劣化を最小限にするための対策を十分に行うこと（光、湿気対策の充実）。
【自動車によるアクセス】 ・駐車場は普通車60台規模で少ない。 ・東名静岡東スマートインターチェンジからはやや離れており、日本平・三保松原方面とは逆方向になるため、集客効果は限定的となる可能性がある。 【公共交通機関等によるアクセス】 ・静岡街中・登呂双方のバス停がわかりにくい。

その他のご意見（ご提案）

【景観】
・周辺民家とのマッチングが悪い。景観が合わない。視野を遮る植栽や壁は設置できるのか。
・遺跡としてのスケール感が乏しい。敷地が狭く、象徴的な大型の建造物もない。周囲に民家も近接しており、異時代

【休憩施設等】
・小洒落たカフェ・レストランが無い。
・カフェやレストランがなく、長時間滞在できない。
・各美術館・施設内及びその周辺の飲食の場所が充実されていない。
・夜景を楽しめる施設が無い。
・博物館の屋上は、富士山がきれいに見えて眺めがよい。カフェやビアガーデンとして活用できる可能性がある。
・芹沢美術館については、展示にも建築にも見るべきものがあるが、鑑賞後に余韻に浸る余裕のスペースがない。ワー
・博物館屋上からの遺跡の眺めもよい。田んぼアートも行われているとのことであるが、このような立体的な視点・使
・博物館屋上の展望への誘導と、遺跡全景と富士のセットを背景に写真の自撮りのできる台の設置。

【宿泊・体験】
・2000年前の雰囲気で快適に泊まれる設備が無い。
・建築規制もあるが、体験型の施設はどうか。
例）弥生時代の生活が体験できるキャンプ施設。太古の生活を体験するために単独参加を前提とする（一人ぼっちで
夜は、天体解説者や古代の楽器演奏者を招いて演奏会・コンサート等を開催。
安全性を確保したうえで、女性一人でも宿泊、飲食ができる。
手ぶらで来ても、弥生の生活気分が味わえる。
ナイトミュージアム的な運営も検討価値があるかもしれません。
・参加体験施設としてはさらなる可能性あるのでは（古代キャンプなど）。
・子ども（幼稚園児以外）だけでなく、地域外の一般の大人も田植え・刈り込み体験ができる機会 ＋ 参加費の徴収によ

【観光ルートの開拓・周辺施設との連携】
・周辺エリアに、日本平、久能山東照宮、日本平動物園など集客力のある観光・歴史文化施設があり、それらに埋没し
・三保、日本平、久能山から登呂、用宗、焼津に至る１５０号と東名利用の観光ルートの振興。
・登呂エリアのみでは限界がある。静岡駅・市街地から少し離れていることもネック。市内の観光資源のネットワーク
・駿府城跡での市内の観光スポットのＰＲ展示→歴史文化施設に発展
・ふじのくに地球環境史ミュージアムとの連携（特に移動ミュージアム）。
・学校教育との連携強化（先生方向けの研修会を夏休み等に開催）。

【「まちは劇場」との連携】
・まちと一体化している点を生かして、「まちは劇場」のコンセプトをうまく体現できれば、新たな可能性が開けるの

【周辺地域への波及効果】
・周辺に民間施設（売店等）が少なく、地域への波及効果が見えない。
・遺跡周辺への観光業の立地促進策の検討（やまだいちもちの家、旧弥生茶屋との関係も考慮）。

【情報発信】
・北側ガイダンス施設にある遺跡発掘の漫画の拡大版を博物館にも設置。さらに、遺跡の意味を紹介するパネルを駐車
・静岡駅南口の観光案内パネルの設置（路線バス利用者向け）。
・登呂遺跡については、その価値をしっかり伝えることができていないと感じる。２階有料ゾーンに行かなければ、登
わからずに通過することになる。
・気軽に来場、来館してもらうための工夫と専門的な内容をわかりやすく伝えることには違いがあり、復元遺跡、博物

【観覧料】
・博物館又は芹沢美術館への入館は、駐車場代を払えば半額に減免する。

【駐車場（駐車料金）】
・廃屋をそのままにした駐車場のたたずまい、オペレーションのしかたで期待感が薄らぐ。
・入場料300円の博物館の駐車場が400円。印象的に高いと感じてしまう。
・駐車場が有料。
・駐車場が有料である。２時間無料などの前提で無人管理（コインパーキング方式）。２時間を過ぎた場合には有料な

【公共交通機関】
・公共の交通機関でのアクセスがあまり良いとは言えない。
・駅・駿府城公園・市内観光地とのアクセスが不便。
・駿府浪漫バスが通らない。
・週末は静岡駅からシャトルバスを走らせてもらいたい。

【地域住民との関係】
・街中にあり、民家と近接しているため、騒音等の問題がある。駐車場が狭いこともネック。周辺の地元の人を巻き込

・異空間に降り立ったようなハレの特別感・高揚感を提供しづらい。

クショップを屋外で実施せざるを得ない状況も改善すべき点と思われる。
い方の可能性もある。夜のイベントも考えられるのでは（星空×プロジェクションマッピングなど）。

の「ボッチキャンプのみ」）団体は騒ぐので不可。

:り、運営を少しでも安定させる。

ている感がある。逆にそれら施設と連携して一体的に売り込むことが必要ではないか。

化の検討が必要。

では。

場にも設置。

呂遺跡の何たるかを示すものが見当たらないため、駐車場から博物館まで、水田跡もその重要性が

館1階部分からは遺跡の重要性が感じられない。

どにして、人員配置を別に振り分ける。

み、地元の人も一緒に楽しむことができ、メリットがある事業スキームを構築する必要がある。

第８期　静岡市行財政改革推進審議会

委員名簿等

第８期　静岡市行財政改革推進審議会委員名簿

［任期　平成30年９月18日～平成32年３月31日］

（五十音順）

会　　長	田形　和幸	しずおか信用金庫　理事長
職務代理者	小泉祐一郎	静岡産業大学　情報学部　教授
委　　員	岩井泰次郎	日本レーベル印刷株式会社　代表取締役社長
	植田　　眞	市民委員
	内山　和俊	行政経験者
	小島　孝仁	株式会社ＣＳＡ不動産　代表取締役社長
	坂野　真帆	株式会社そふと研究室　代表取締役
	杉山　茂之	あいネットグループ　代表取締役
	鈴木　貴子	市民委員
	西尾　真治	三菱ＵＦＪリサーチ＆コンサルティング株式会社　公共経営・地域政策部　主任研究員

※委員の所属等は平成31年３月時点のものです。

諮問事項に係る審議経緯

第２回審議会	平成30年10月16日	市長から諮問 市長との意見交換 現地視察（登呂遺跡、登呂博物館、芹沢銈介美術館）
第３回審議会	平成30年11月15日	登呂エリアの現状等について説明 登呂エリアの「目指す姿」について意見交換
第４回審議会	平成30年12月12日	登呂エリアの「目指す姿」の具体的なイメージについて議論
第５回審議会	平成31年１月15日	答申に向けた意見の整理
第６回審議会	平成31年２月18日	答申内容のまとめ
第７回審議会	平成31年３月20日	答申（審議結果の報告）

写

30 静総総第 1927 号
平成 30 年 10 月 16 日

静岡市行財政改革推進審議会
会　長　　田　形　和　幸　様

静岡市長　　田　辺　信　宏
（ 総 務 局 総 務 課 ）

歴史・文化資源の活用及びその周辺地域との連携による地域活性化について
～登呂エリアをモデルとした歴史・文化資源の活用方策～（諮問）

静岡市附属機関設置条例別表第１の規定に基づき、下記のとおり諮問します。

記

本市では、第３次静岡市総合計画において、市内に点在する数々の歴史や文化といった地域資源をみがきあげ、文化力を経済力へと転換させることで、地域を活性化させる「歴史文化のまち」の実現を目指しています。

そのため、「歴史文化のまち」の拠点として平成 33 年度にオープンする「（仮称）静岡市歴史文化施設」を中心に市内に点在する地域資源をネットワーク化するとともに、個々の資源をより一層みがきあげていく必要があります。

当該歴史文化施設とネットワーク化される地域資源の中には、近年、国宝や、世界遺産になったことを契機に訪問者が増加したものがありますが、訪問者が伸び悩んでいるものもあります。特に登呂遺跡は、国の特別史跡であり、全国的な知名度がありながら、訪問者が低迷している状況にあります。

そこで、今回は、訪問者の増加を目指している登呂博物館及び芹沢銈介美術館を中心とした登呂エリアを取り上げ、地域の活性化に向けた、歴史・文化資源の活用及びその周辺地域との連携の方策について、諮問します。

歴史・文化資源の活用及びその周辺地域との連携による地域活性化について

～登呂エリアをモデルとした歴史・文化資源の活用方策～

平成 31 年３月
静岡市行財政改革推進審議会